



「研修便り」は、高知市立学校教職員研修の成果・内容の共有、研究所から発信する情報の周知を目的として、発行していきます。

特別支援教育学校コーディネーター研修会 及び 自閉症・情緒障害特別支援学級充実研修

平成29年7月25日（火）実施

目的 特別支援教育学校コーディネーターとして必要な専門知識・技能を習得し、その資質の向上を図る。また、自閉症・情緒障害特別支援学級担任の障害等の特性理解や適切な対応についての専門性の向上を図る。合同実施をすることで、校内の支援体制の充実につなげる。



「自閉スペクトラム症等の子どもたちの理解と支援について」
講師：高知大学教育学部 松本 秀彦 准教授

○ 発達障害

| | |
|---|--|
| 神経発達症群 生まれつきなんらかの脳機能不全があり子ども自身の努力不足によるものではない。 | 自閉スペクトラム症 ASD Autism Spectrum Disorder |
| | 注意欠如・多動症 ADHD Attention-Deficit Hyperactivity Disorder |
| | 限局性学習症 LD Specific Learning Disorder |

○ 自閉スペクトラム症の児童生徒 「こんな場面、どのような対応をしたらよい？」

| 場面 | NG対応 | GOOD対応 |
|---------------------------------|---------------------------|---|
| 曖昧な言い方では伝わらない。どうすればよい？ | 「なんで分からないの？」と聞く。 | 具体的に言う。例 × 床をきれいにしてね。 ○ 床を雑巾がけしてね。 |
| 聞こえすぎ、見えすぎて困る、感覚過敏はどう対応すればよい？ | 我慢させる。 | ヘッドホンやサングラスを使うなど、落ちついた環境づくりをする。話すときは、一人ずつ話す。 |
| 人の気持ちが理解しにくいため、トラブルが多い。どうすればよい？ | 「相手や周りのことを考えて行動しよう」と注意する。 | 気持ちを落ち着かせる方法が身に付くよう指導する。クールダウンルームをつくる。仲間外れにしない。 |

○ 模擬事例

小1で多動と衝動性。教室を立ち歩く様子が頻繁に見られる。身の周りの整理整頓が苦手な忘れ物をよくする。ADHDの診断を受け、服薬を開始。
小2で担任や学級集団が変わり、授業に集中できず教室を出て行く様子も見られるようになった。
小3で、自閉症・情緒障害特別支援学級に入級し、算数と国語、自立活動以外は交流学級で学習。交流学級では、したいことを止められると怒って粗暴な態度が見られる。

どのような手立てが必要か考えよう

<検討する視点>

- Q 自立活動ではどのような目標や手立てを？
自己理解と感情コントロールを身に付けて対人関係の力を付ける。
- Q 交流学級で学習についていくためにどのような手立てを？
授業参加できるような指導・授業の組み立て、座席位置の配慮、認知特性にあった教材の工夫、適切な行動に対して賞賛等の手立てをする。
本人が授業に参加するためのスキルを身に付ける。（援助要請・予習・発言の仕方）
一番大事なことは「教員の指導の工夫」。まずは、教員側の工夫次第でうまくいくことが多い。座席、ノートテイクの分量、活動の多様性、指示の適切化を！（短く・具体的に・例示・供覧）

★教えて！松本先生★

Q. 特別支援学級の担任が児童生徒を交流学級に送り出すときは、交流学級の担任との情報の共有が大事であるが、どのようにすればよいですか？

児童生徒の「できないこと」を挙げて伝えるのではなく、「できるリスト」を示す。ポジティブな情報伝達をしましょう！



【講義】「新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくりの在り方」

全体講師：文部科学省初等中等教育局教育課程課 直山 木綿子 教科調査官

平成30・31年度 移行期間にしっかりと取り組むために

全面実施の際、学年によって子どもたちの外国語の既習事項に差が出ないように、今、新学習指導要領を見据えて取り組むことが求められています。

3・4年生 外国語活動

「聞くこと」「話すこと」

「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しむ。

コミュニケーション能力の素地となる資質・能力

5・6年生 外国語科

「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」

発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行う。

コミュニケーション能力の基礎となる資質・能力

文部科学省移行措置案： 3・4年生 15時間 5・6年生 現行35時間+15時間

現状における課題

学年が上がるにつれて低下する児童生徒の学習意欲

学校種間の接続

「話すこと」「書くこと」などの言語活動

コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に
応じた表現

(中教審答申から)

対応

「ALTが授業」ではなく、「ALTと授業」をする。学級担任は外国語を使うモデル

教職員全体による外国語活動の研究授業、校内研修の実施

新しいものへの不安感や負担感を払拭するための正しい情報の共有・準備

教科化に備えての指導のワンポイント

新たに加わる文字指導では、大文字と小文字を「識別できる」「読める（発音できる）」「4線以上にきちんと書ける」の三つをめざします。これらの内容をドリル学習のように教えるのではなく、読んだり、書いたりする必然性のある場面を設定し、そのなかで読んだり、書いたりする活動を通して学習することが重要です。

★ 平成30年2月には移行措置に対応した児童用冊子やデジタル教材も配付されます。

「やってみないと分からない。まず一步踏み出してやってみる。」

～ 目的・具体があれば動ける。取組には目的・具体をもつこと。～



【受講者の感想】

- ・ 新学習指導要領の特色について、詳しい説明をいただき、理解を深めることができた。全面実施に向けてのスムーズな移行のための2年間の大切な取組や中学校との連携についてもイメージがしやすくなった。
- ・ 今のままでは何もしないまま、新学習指導要領の全面実施を迎える子どもがいることを知った。そのために先を見据えた取組を移行期間中に考え、実践していきたい。
- ・ 具体的に教科化に向けた文部科学省の働きかけや小学校の教科化に向けての流れが分かった。子どもたちに対して、何かしら教師が働きかけて取り組まないと、たくさん外国語に触れている子どもと、そうでない子どもで大きく差が生まれるので、責任があると思った。